



2022年、新たな一歩を踏み出す寅になろう

(特活) せんだい杜の子ども劇場

代表理事 齋藤 純子

皆様お揃いで、佳き新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

コロナ禍が続く旧年中は、会員の皆様はじめご支援を頂戴しております皆様より一方ならぬ心の支えをいただき大変ありがとうございました。おかげ様を持ちまして、昨年12月には通常総会を開催致すことができ、ご提案申し上げた全議題にご承認をいただきました。

総会終了後の理事会におきまして、今後2期の体制として代表理事を齋藤純子が、副代表理事には阿部清人理事、有坂紀美江理事が選出されました事をご報告申し上げます。

さて、昨年はいよいよの新たな一歩を踏み出す前のターニングポイントといえる一年間であったと私は思います。まずは、住み慣れた事務所の移転がありました。当法人の生い立ちからすると、市内3劇場が合併し新事務所として構えたのが18年前でした。泉中央の発展と共に幹線道路沿いの建物林立が続く中、事務所前に田んぼが一区画あり子どもたちに身近に感じてもらいたい事が決め手となりました。その後、2年間の話し合いを経てNPO法人化そして児童館の指定管理へと踏み出した原点地です。オーナーの若生様とご近所の針生ご夫妻は私たちの活動を認めて頂き、日々励ましてくださいました。心身ともに支えて頂いたご両家の皆様、本当にありがとうございました。

もう一つのポイントは大変な時こそ「つながる」という事です。コロナ禍の中、人々の間には距離感が助長されました。不安が増幅され、どの世代も心身ともに疲弊したことは歪めません。けれども、子どもたちや子育て中の親たちへ心身ともに安寧を届けることができるのかを、子どもと子育て支援に携わっている人々は立場や組織を超えて考え始めました。得体の知れないウイルスと対峙し、どのようにしたら「できない」を「できる」にしていくのかという視点を持つようになったと思います。せん杜の自主事業であるママパパライン仙台は一年を通して

実施できましたが、人々を繋ぐ心の居場所となったに違いありません。児童館と児童クラブ現場では、たくさんの制約がある中で、ミーティングを重ね子どもとその家族の支援について日々検討しフル回転ではありませんが形にしてきました。一現場ではできない事を皆が知恵を寄せ合い実現した一つの集大成として全国児童館・児童クラブみやぎ大会がありますが、つながった結果、出来ないと思っていたことを可能にしました。その中で発揮されたのが人のネットワークと若い力です。東日本大震災後もそうでしたが、大変な非常事態の時こそ人々はつながり、怯むことなく前を向いて来たという事に重なります。つながることで新たな発想力とチャレンジ力が生まれ変わっていくこと。大人の真価が問われますが、次の世代へつなげるための頑張りどころではないでしょうか。

その上で、せん杜はそのつながりを「協働」に変えていく2期一年を目指したいと思えます。仙児連を中心とした行政との市民協働、地域&学校との協働を目指してきた児童館事業はもちろんですが、世代間や諸団体間の協働もあってしかるべき。様々な協働の縁で今年こそは10回目となる東日本大震災の被災地支援「杜の子まつり in 石巻」と鑑賞会を復活したいものです。コロナ禍が続く中では立場や組織を超えた協働が大切な要因となってくるはずですが、2021年までに積み上げてきた人や組織間の協働を基に、「できなかったことをできる」に変えていく気概を持って進みましょう。最後に、せん杜は若い人の思いと発想力を活かし、その力がこれからの原動力となる！ことを忘れてはいけないと申し添えます。

末筆乍ら、皆様にとりまして2022年寅年が幸多き一年となりますことをご祈念申し上げます。

